語る怪談と読む怪談

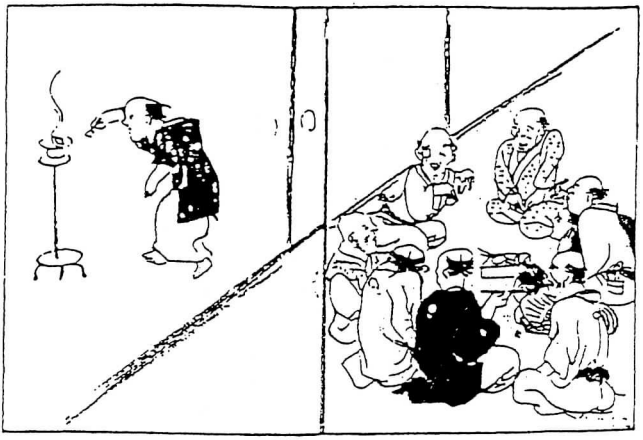
――小泉八雲の「狢」の場合

太刀川　清

江戸時代に百物語という怪談会が流行した。暗夜に人々が寄り集って、青い紙を貼った行灯に百筋の灯心を点し、互に怖しい話をひとつ語っては、灯心を一筋ずつ消して行く。次第に灯も微かになって、いよ〳〵百筋目が消えてあたりが真暗になったとき、化物が出るというのである。江戸時代の初期、寛文六年（一六六六）に出版された『伽婢子』の巻末「怪を話れば怪至る」には

むかしより人のいひつたへしおそろしき事、あやしき事をあつめて、百話（ひやくものがたり）すればかならずおそろしき事、あやしき事ありといへり、百物語には法式あり、月くらき夜、行灯に火を点じ、その行灯は青き紙にてはりたて、百筋の灯心を点じ、ひとつの物語に灯心一筋づつ引とりぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろひて、何となく物すごくなり行也、それに話（かたり）つづくれば、かならず、あやしき事おそろしき事あらはるゝとかや

と、その様子を伝えている。このような習俗がいつの頃から始ったのか定かでないが、当初は練胆の場でもあって、集った人々も真摯なものであったらしいが、それが懐疑的なものとなり、ついには化物を見たいという好奇心も手伝って享楽的な遊戯へと変って来たといういきさつがある。(注1)



（『教訓百物語』から）

百物語怪談会は誰でも何処でも行なうことが出来たが、話はその場その時の一回きりで消えて行ってしまう。しかしその話を纏めることで新しい怪談集が出来上ることに思い到る。「何々百物語」という怪談本で、この類のものがまた盛んに出廻ることになる。(注2)

百物語の怪談集の出版は勿論読者を意識した読みものとしての怪談である。百物語は語る（話す）怪談の場である。怪談の世界も語る怪談から読者を意識した読む怪談へという新しい事態をみることになる。そしてそこには表現描写の上で本質的な違いがなければならない。

一

明治二七年（一八九四）七月扶桑堂出版の町田宗七編『百物語』は、「爰に方有名の諸大家及び諸談落語の親玉株、一夕集って戯れて百物語を為す……」と、三十四の怪談を収める。その三十三席で御山苔松が語った怪談は東京の紀伊国坂に出た獺の化物

の話であった。この化物の話は江戸時代初期の怪談本『諸国百物語』（延宝五年・一六七七）の「会津須波の宮首番と云ばけ物の事」（巻一）の「首の番（朱の番）」や、『宿直草』（延宝五年・一六七七）の「武州浅草にばけ物ある事」（巻一）に類するものであるが、苔松の話の直接拠ったのは『老媼茶話』（寛保二年成・一四二成）の「会津諏訪の朱の盤」（巻三）である。しかしその間の事情についてはいまは触れない。要するにこの獺の化物の話が百物語で話したそのまゝのもので、いわゆる語る怪談であることが、その言いまわし、その表現から確認されればよいのである。

拙者の宅に年久しく仕へまする佐太郎といふ実直な老僕が御坐りますが、この男が若い時に遭遇した話しださうで御坐いますが、或日のこと赤坂から四谷へ参る急用が出来ましたが、生憎雨は降ますし殊に夜中の事で御坐いますからドットいたしません次第で御坐いますが、急用ゆゑ致方なくスタ〳〵とやッて参り紀の国坂の中程へ差掛ッた頃には雨は車軸を流すが如くに降てまゐり風さへ俄に加はりまして物凄きこと言はむ方も御坐りませんからなんでも早く指す方へまゐらうと飛ぶが如くに駈出しますと、ポント何やら蹴付たものがありますから、ハット思ッて提灯を差し付て見ると、コハ如何高島田にフサ〳〵と金紗をかけた形姿も賤しからざる一人の女が俯向に屈んで居りますから、驚きながらも貴女どうなさいました卜聞と俯向たまゝ持病の癪が起りましてといふからヲヽ夫ハ嘸かしお困り、ムヽ幸ひ持合せの薄荷がありますから差上ませう、サヽお手をお出しなさいと言ふと、ハイ誠に御親切様にありがたう御坐いますと礼を述ながら、ぬッと上た顔を見ると顔の長さが一尺もあらうといふ化物、アッと言て逃出したのなんのと夢中になッて三四町もまゐると、向ふの方から蕎麦

うわウイーチンリン〳〵と一人の夜鷹蕎麦屋がまゐりましたから、ヤレ嬉しやと駈寄て、そゝ蕎麦屋さん助けてくれト申しますと蕎麦屋も驚きまして、貴郎トど如何なさいました。イヤもうどうのかうのと言て話しにはならない化物に此先で遭ひました。イヤ夫は〳〵シテどんな化物で御坐いました。イヤモどんなと言て真似も出来ませんドゞどうかミゝ水を一杯（ママ）下さいト言ふとお易い御用と茶碇へ（ママ）水を汲でくれながら、モシその化物の顔ハこんなでハ御坐いませんかト、言ッた蕎麦屋の顔が、また弐尺、今度はあッと言た儘気を失ッてしまひまして、時過て通りかゝッた人に助けてもらひましたが、後に聞ますると、それハ御堀に栖む獺の所行だらうといふ評判で御坐いましたが、この説話は決して獺の皮ではないさうで御坐います。

こゝで苔松の怪談をとりあげたのは、これが後に小泉八雲（ラフカディオ・ハーン　1859—1904）によって読む怪談として扱われることになるからである。

二

八雲によってなされた怪談を再話と呼ぶ慣わしがある。(注3) それは日本の古い時代の怪談の単なる逐語訳でもなければ訳述でもない。そこに骨を借りた八雲自身の創作である。八雲の創作には夫人の小泉節子が係わっていたことは周知であるが、その節子は「思い出の記」の中で、つぎのように述べている。

私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、そ

の筋を書いておきます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと、「本を見る、いけません。たゞあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」と申します故、自分の物にしてしまってゐなければなりませんから、夢にまで見るやうになって参りました。

実はこゝに再話の方法、すなわち八雲の創作の方法が述べられているのである。

一体、創作の基本をなすものに主題、素材、構成、表現の四つの要素がある。八雲の場合では素材はすでに原話としてある。この原話をどう換骨奪胎するかに主題、構成、表現が問題になる。これを節子夫人に則して言えば「あなたの話」は構成を、「あなたの言葉」は表現を、そして「あなたの考え」とは主題を意味することになりはしまいか。八雲の怪談は明かに語る怪談の骨を借りてする読む怪談の創作であったのである。

三

御山苔松の語った怪談はMujinaとして再話化されて、Kwaidan（1904）に収められた。苔松の話は獺であったが、八雲はこれを狢にかえたのである。いずれも人を訛すもの同志であったが、獺がOtterの称呼でヨーロッパに広く分布するのと違って、ヨーロッパではアナグマ（bader）であり、またタヌキ（bader）と混同される狢の怪事は確かに東洋の、日本の怪であった。西洋で称呼のない狢を八雲は日本

の称呼のまゝMujinaと題名としたのである。Mujinaはまさしく珍しい日本の怪事であって西洋に紹介する意味もあったのである。

短かい原話に対して八雲のMujinaは邦訳でその約二倍度の小篇である。(注4)

東京の赤坂には紀伊国坂という坂がある。その坂道がなぜこう呼ばれるのかそのわけは知らない。坂の片側は古いお濠で、深くて幅もなかなか広く、緑の土手がどこぞのお邸のお庭らしい場所まで高くもりあがっている。他の側は御所の高い壁で、石垣が長く長く続いている。街灯や人力車が世に現われる以前、この界隈は日が暮れた後は人気が絶えてたいへん物淋しかった。それで家路に遅れた徒歩の人は、日没後ひとりで紀伊国坂をのぼって帰るよりは、何町遠回りしてもよいからよその道をまわって帰ったものである。

というのもみなそのあたりに出没する一匹の狢のゆえであった。

その狢を最後に見かけた人は京橋に住んでいた年老いた商人で、もう三十年前ぐらいに亡くなった。以下はその老人が物語ったままの話である。――

ある晩、かなり夜も更けた時刻、その男が紀伊国坂をすたすたと急ぎ足でのぼって行くと、お濠端に女がうつむけにかがんでいるのに気がついた。ひとりきりで、ひどくしゃくりあげて泣いていた。さてはお濠に身を投げて死ぬつもりか、と察した男は、なにか助けてやれぬものか、なにか自分のできることで慰めてやれぬものか、と思って立ちどまった。ほっそりとした上品な女で、身なりもいやしからず、髪は良家の子女のように高島田に結ってある。

「お女中」
と男は大声で呼びかけながら近づいた（そのころは身分のある見知らぬ若い女には「お女中」と呼びかけるのが礼儀だった）。
「お女中、そう泣きなさるな。なにか困り事でもあるなら言うてください。もしお助けできることがあるなら、喜んでお助けいたしましょう」
（商人がそう言ったのは心底からそのつもりだった。商人は本当に親切心に富んでいたのである）
しかし女は泣き続けた、――そして長い袖の片方で泣顔を男から隠していた。
「お女中」
と男はできるだけやさしい口調でまた声をかけた、
「まあ、どうか、私の言うことをお聞きなさい。……この辺はどう見ても若い女が夜分に出歩くような場所ではない。お願いだから、お泣きなさるな。さ、どうすれば私がなにかお役に立つか、それを言うてください」
ゆっくりと女は腰をあげて立ちあがったが、しかし背を男の方に向けたまま、顔を長い袖に隠して泣きじゃくった。男はそっと女の肩に手をやって、言い聞かせた、
「お女中、お女中、お女中……まあ私の言うことをお聞きなさい、ほんのちょっとの間でいいから。……お女中、お女中」
……するとその時、女はこちらを振向いて袖を落すと、自分の顔をその手でつるりと撫でた。――

と見れば女の顔には眼もなければ、鼻もない、口もない、――アッと男は悲鳴をあげて逃げ出した。

紀伊国坂を上の方へ、上の方へ無我夢中で逃げ出した。あたりは一面の真暗闇、前方は空無でなに一つ見えない。怖さのあまりよう後を振向くこともできず男はひた走りに走った。するとやっとのことで提灯の火が見えたが、遠くの方で辛うじて螢の火ぐらいの大きさに見えた。男が一目散でそれに向かって駈寄ると、道端で屋台を開いた夜鷹蕎麦の提灯とわかった。しかしあした目にあった後では、どんな光であれ、どんな人であれ、とにかくそこに口の利ける人がいるというだけでそれで良かった。男は駈込みざま蕎麦屋の足もとにへなへなと崩れ折れると、ただもう「ああ、ああ、ああ」と声にならぬ叫び声で呻いた。

「これ、これ」

と蕎麦屋は突慳貪に言った、

「これ、いったいどうしました？　誰かあなたに怪我でも負わせましたか？」

「いや、誰も私に怪我をさせたのじゃない」

と男は、はあ、はあ、喘ぎながら言った、

「ただ……」

「ただあなたをおどしただけですか？」

と屋台曳きの蕎麦屋はいたって冷淡なたずねた、「それでは追剝ぎですか？」

「いや追剝ぎじゃない、追剝ぎじゃない」

と恐怖におびえた男は喘いだ、

「出たんだよ……出たんだよ女が。――お濠端(ほりばた)で。――そしてあの女が見せたもの……ああ、あの女が私に見せたものをおまえさんに口で言ったって話にならない！」

「へぇ！　もし、ひょいとして女があなたに見せたものはこんなのではございませんでしたか？」

と一声言うと蕎麦屋は、その自分の顔を手でつるりと撫でた、――と途端に蕎麦屋の顔は大きな卵のようにのっぺらぼうとなった。……そして、それと同時に、屋台の火も消えた。

四

「狢」は東京の紀伊国坂の説明から始まる。日が暮れてからはこの坂は人通りもなくなってしまう。それが一匹の狢のせいであるという前置きがある。そして続いて、

その狢を最後に見かけた人は京橋に住んでいた年老いた商人で、もう三十年前くらいに亡くなった。こうしてこの話の語り手が紹介される。しかしその老商人の名も明かにされず、しかも三十年前にその人は亡くなっている。したがって、その後は誰も紀伊国坂で狢に出合っていないのである。苔松の話と違って具体的にその人を明らかにせず、いまに至る適当な歳月の隔りを設けたのも、この話が信憑性を斉すものので、再話はすでにして怪談としての形をとる。

怪談は多分に聞き手や読者の心象に係わるところがある。享受者に徒ならぬ雰囲気を思わせる情景が必

要である。雨降りの夜中、風も出て来る、雨は更に激しく降って来る。少しでも早くと飛ぶように駈け出す老僕、原話ではこんな情景を語って、苔松は最高の雰囲気づくりをして聞き手に臨んでいる。しかし再話では、「ある晩、かなり夜も更けた時刻」とだけあって何の情景描写もないのは如何したことか。老商人はこれから出合う化物などを微塵も考えていないからである。このあと出合う女が化物であると十分に予測出来る語りぶりの原話と違って、再話では「お濠に身を投げて死ぬつもり」の女と思わせるだけで十分で、原話のような情景描写は特に必要でなかったのである。そのかわり老商人は身投げを思いとどめようと必死で、一方的な慰留の会話がつづくことになる。そしてその言葉には商人が優しく親切な老人であることが的確に表現されているのである。

ところで持病の癪で俯向きに屈んでいた女と、身投げを思わせる女とでは、同じ親切な行為でも対応に違いがある。再話では女を慰留するうちに訝しさもなくなり、恐怖心も薄れて行く、にもかかわらず実はそれが狢の化物であったとなると、その驚きと恐怖はなお一層のものとなり、次第に高調した場面へと展開することになる。老商人の親切な言葉にも全く応答のなかった女が、

……するとその時、女はこちらを振向いて袖を落すと、自分の顔をその手でつるりと撫でた。――と見れば女の顔には眼もなければ、鼻もない、口もない――アッと男は悲鳴をあげて逃げ出した。

原話では「ぬッと上た顔を見ると顔の長さが二尺もあらうといふ化物、アッと言て逃出した」とあるところ。二尺ほどの長さの顔が再話では眼鼻のない顔、いわゆるノッペラポウという化物で、しかもその顔を見せる時には「その手でつるりと撫でる」と、恐怖を具象的に表現した怪異描写は見事である。

その恐怖は、つゞく描写によってなおも大きいものとなる。原話では無我夢中で逃げ出すと「蕎麦うわウイーチンリン〳〵」と好運にも向かうから蕎麦屋の屋台がやって来る。時宜を得た屋台では恐怖心を募らせはしない。再話ではあたりは真暗闇、前方は空無で何一つ見えない。後も振り向けない、やっと遙かさきに螢の火ほどの提灯の灯を見つけて、夢中でそれに向って駈けて行く。老商人の恐怖とそして安堵とわずかの部分ではあるが情景描写と心理描写が見事に一致したところである。

漸くたどり着いた蕎麦屋に語る老商人の会話にならない言葉「ああ、ああ、ああ」、「出たんだよ……出たんだよ女が――」は、原話では水を一杯所望するところである。そしてそのあともう一度件の顔が現われ趣向は原話と同じであるが、「……、そして、それと同時に、屋台の火も消えた」と結んで、怪談としての余韻を残した再話に対して、原話「獺の皮」のおちは余りにも座興である。いかにも遊興的な百物語の様子が髣髴とする。

五

「狢」をもって八雲の再話の方法を考えたところで、再び件の「思い出の記」のことにもどる。八雲が夫人節子に求めたところを八雲の再話の方法であるとすれば、「あなたの話」としてまず化物との出合いがある。原話で癪と思って薬を与えようとした女を、濠に身を投げようとする女としたことである。そのためそれを慰留しようとすることで構成の上で大きく変わることになる。これが老商人の一方的な会話で

進められる一篇の重要な段落である。女の応対がないまゝにOjochū（お女中）の呼びかけが八回にも及んでいる。これが優しい親切な老商人を具象化する人物描写になったことは前述したが、これは「あなたの言葉」に係わることでもあった。それでもなおも描写が不十分とは思いば「商人がそう言ったのは心底からそのつもりだった。商人は本当に親切心に富んでいたのである」とまで述べて徹底させようともする。それに顔を手で撫でゝ見せる目鼻のない顔の怪異描写は、異常さだけの二尺もある長い顔の化物と較べるなら再話は恐怖感の上で確かに秀れているのである。

また「あなたの考え」ということでは、原話も再話も化物の怪事とすれば獺も狢も大差はない。仮りに節子夫の考えがそこに介在していたなら、かかる心優しい親切な老人を驚かせ怖らすなどとんでもない狢であるという気持があったのではないか。女に化けた紀伊国坂の狢というだけではなく、そうしたヒューマニティーがあったかも知れない。とすれば「あなたの考え」は確かに主題に係わって来ることになる。

八雲のMujinaは殊更の傑作ではない、ここで敢てとりあげたのは八雲の再話の方法を理解するに恰好なものであったからである。さらに言えば江戸時代を通じて盛んに出廻った怪談を素材とすることで、新しい怪談の創作が可能であることも言いたかったのである。

（注1）　拙著『近世怪異小説研究』（昭和五四年・笠間書院）第一章「百物語怪談会と怪異小説」。

（注2）　近世を通じて多くの出版があったが、そのいくつかを記すと、『諸国百物語』（延宝五年）『諸国新百物語』（元禄五年）『御伽百物語』（宝永三年）『太平百物語』（享保一七年）など。

（注3）　平井呈一氏は『全訳小泉八雲作品集』第九巻解説で、

八雲の怪奇談は再話文学というべきもので、これは翻訳でもなければ、また一般にいうところのダイジェストでもなければ、またいわゆる翻案でもありません……これは風変りの珍しいもの、怪奇なものを愛するかれのロマンティック　エクゾティシズムが東洋および近東の古典文学の中に見つけた妖異魂麗な原石を、自分の手で切截した象嵌的な工作であります。したがって翻訳とは最初から意図と目的を異にするもので、すくなくとも骨をかれに借り自分で細工するという工人的な創意を含んだものであります。

（注4）　Mujinaの邦訳は多いが、近時のものとして講談社学術文庫版の平川祐弘氏の邦訳によった。

○本稿は平成十年度上田女子短期大学開放講座での「怪談から怪談文学へ」をまとめたものである。